

十勝川直轄砂防区域の歴史②

明治時代から現在

入植時代（明治時代後半から）

中札内村原野の開拓は、明治三十年四月十勝に入地した越前団体の同伴者上丸弥次郎が、明治三十八年頃人跡未踏の上札内の地に拝小屋（おがみごや）を建て、開墾に着手したのが中札内村開拓の初めとされています。

一 移住

本州では土地が狭くて営農が成り立たず、人間の間引きをしたようなもので、北海道へ来た。ひと稼ぎして、金を持って故郷に錦を飾る気持ちで来た人がほとんどだった。

（壬生幸作 常磐地区）

北海道に行けば金になると言うので、一家七人で富山から石狩に入植した。明治三十六年、わたしが六才の時だった。しかし荒地で畑にならず、知人を頼って帯広に来た。当時は鉄道はもちろん、道らしきものもなく、母は乳飲み子の妹を背負って新得の山越えをした（狩勝峠越え）。中札内に来たのは私が十二才の時、明治四十二年だった。

（西山辰次郎 上札内地区）

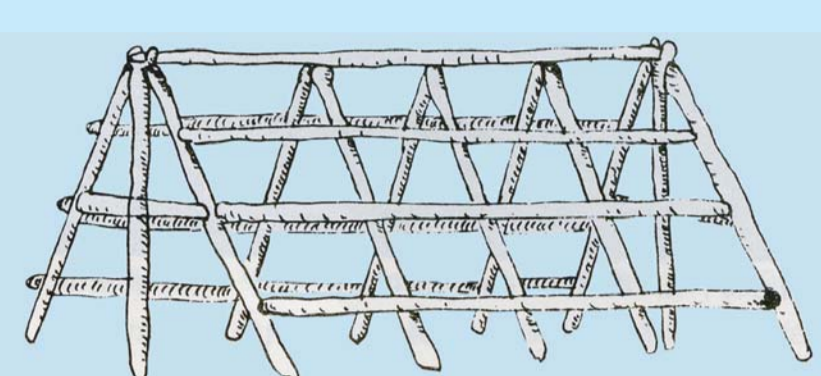
明治二十八年、二十九年の兩年、九頭竜川の氾濫で桑畑も水田も流され、小森清大夫の主唱によって北海道移住を決心した。三月三日第一次移民二百三十戸余人が、福井の三国港に集結、岩井丸という汽船で出帆した。

三月九日函館に着き泊して、恵比須丸という船で出帆、十四日に大津の沖合に着いた。大津に上陸するためには、汽船から解（はしけ）に乗り移らなければならず、躊躇していると船員が突き落とし、女や子どもは解の船頭の腕めがけてほうり投げた。大津で二泊して休養し、三月十六日帯広へ向かって出発した。途中、木挽小屋に泊まったりして帯広に着いたのは三月十八日であった。

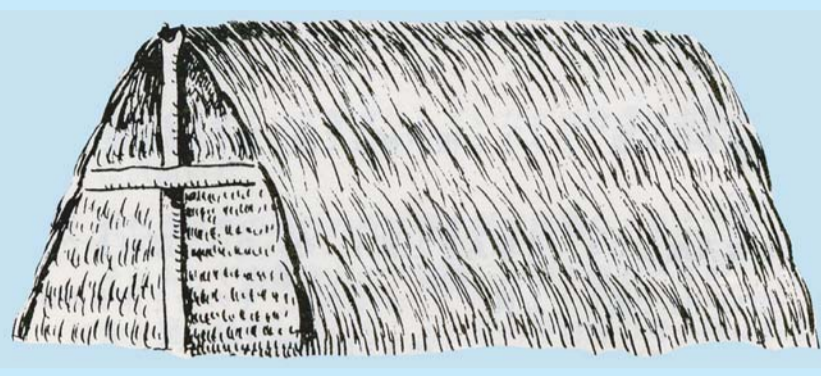
六月、四戸が貸付地に草小屋を造って入地、札内原野の開墾に着手した。（越前団体の入植 帯広市 一九八四年 『帯広市史』参照）



入植時代の草小屋（池田町史編纂委員会 1974年 『池田農場史』）



拝小屋（おがみごや）（池田町史編纂委員会 1974年 『池田農場史』）



二 住居

住居は割木の柱の堀立てで、屋根は茅葺き（かやぶき）、壁も茅囲いで、出入り口にだけ板戸を使った。その板も丸木を引き割って作った。

（道見金松・常磐地区）

ストーブも無く、たき火に天井から炉鏝（自在鉤・じざいかぎ）を下げて、鍋で煮炊きをしたり、鉄ヒンを真っ黒にして湯を沸かし、灯はブリキ缶で作ったカンテラを使い、後でランプが入ったが貧乏農家では相当遅れて使われた。それも二分芯（にぶしん）の小さいものであった。

（建部しさ・常磐地区）



一原生林の開墾風景（北海道 一九二一年 『十勝国産業写真帖』）



一原生林の開墾風景（北海道 一九二一年 『十勝国産業写真帖』）

三 開墾

我が家が入植した土地は一面ヨシなどの雑草が生育していて、先の方が見えない状況、熊が出没するんじゃないかと。小学三年生くらいの私は、親にマッチを持たされ、どこからでも良いから火をつけて歩け、と言われ、火入れをしたものです。

（安達幸治・栄地区）

開拓時代に馬が各戸にいない頃は、手間賃をもらって専門に馬耕する人がいました。特に新墾地は技術を要するので後年まで続けられました。

（壬生幸作 常磐地区）

当時は起こした畑の土を砕土する機械もなかったの
で、土が硬くて畝（うね）もできず、畑に種をまくの
に棒で穴をあけて豆をまきつけたのです。もちろん
肥料などは使いませんでした。

（建部しさ・常磐地区）



↑馬を使った農地の開墾（北海道 1911年 『十勝国産業写真帖』）

四 作物

一年目はソバを作りました。ソバは七十五日で収穫できたから、二年目からエンドウを作りました。それにイナキビ、長うすら（つるなしインゲン）、遅く播いてもとれた手亡（てぼう・インゲン豆の一種）です。イナキビは新墾地では作りづらく、豆類を作った後、土地が慣れてから作付けしたものです。

（安達幸治・内山正次郎・栄地区）

五 食生活

主食はイナキビ、麦のほかトウキビの搗（つ）いたものを食べ、雑穀を混ぜたこともあったし、野菜は自給、味噌も麹（こうじ）のいらぬ玉味噌を作りました。盆・正月の御馳走と言っても、現在の普段の食事よりも悪かったものです。

（建部しさ・常磐地区）

当時の主食はイナキビご飯、麦ご飯、ソバだんごで、米は盆・正月にしか食べられなかった。春になると札内川に鱒（ます）が上ってきたし、秋には秋味（鮭）がたかさん上ってきた。家の裏に流れるマス川にも秋味が上ってきたものだ。ヤスで突いて採るのだが、食料があまり無かった時代だから大切な栄養源だった。ヤマハもたくさんいた。

（島崎五作・元大正地区）

大正初期の札内川上流では、ヤマハ（ヤマメ）やカジカが群れをなし、移民達を誘い出した。二時間で五〇〇匹（一匹五寸から七寸 十五秒から二二秒）のヤマハを釣るなど、今では信じられないくらいである。

ハベキキ川のアメマスは八寸から一尺（二四秒から三〇秒）もあり数は数えきれない。時には学校を休み、ざるを持ち出す女の子がいて、食膳をにぎわした。それとザリガニは、ハラス（砂利）のようにいた。（中札内村史）

六 結婚

結婚も昔は親の決めたままで、相手の顔を一度見る程度でした。一度も相手の顔を見ないで結婚した人もたくさんいたものです。私の場合は同じ部落の人だったから知っていましたが、楽しい思い出はなく、苦しいことだけで、朝起きて歯を磨く暇もなかった程で。現在が一番楽です。

（建部しさ・常磐地区）

七 娯楽

六月の時きつけが終わわり、農作業も一段落すると祭事が多くありました。六月二十五日は大正村の招魂祭でしたが、神社に在御軍人も出席して相撲そして銃剣道大会。七月十五日は地藏祭で風は相撲で夜は踊りでした。

八月十五日は盆踊り、九月の秋祭りにも相撲や踊りがありました。冬はかるた（百人一首）を背負って家を回ったものです。映画は一番の娯楽で、田中さんの家で白い外壁に画像を写して見たものです。

（片岡美江・高橋ナミ・紺野長治 栄地区）

八 学校

入植後子ども達の教育に寺子屋を建てました。三間に四間の草小屋で床にわらを敷き、その上に筵（むしろ）を敷いただけ。勉強は読み、書き、ソロバンで、教員は筆、墨、スズリ、石板、石筆で風呂敷にくるんでかついたものでした。（中札内村史）

親の理解もあって小学校六年間、大正にあった幸震尋常小学校（現大正小学校）に行きましたが、片道十四里の道を徒歩で通ったものです。当時は時計など買えるわけもなく、母親は朝暗いうちに起きて弁当を作ってくれました。

（川田時寛・協和地区）

以上 中札内村 一九六八年 『中札内村史』 より引用

現在の札内川

サツナイは「渴れる川」

札内川は日高山脈から押し流されて堆積した砂礫の中を水が伏流（河床の砂利層に水が潜ること）し、冬と夏の湧水期になると川の水が濁れたように見えることから、先住のアイヌの人は「サツナイ・渴れる川」と言ったのです。

こうした現象が、顕著にみられる場所は上札内市街地の少し上流です。札内川の水がきれいでおいしいのは、この伏流という現象によって、川の水の汚れがキレイにろ過されるからです。

札内川は水生生物のよい生息環境

札内川は扇状地の中を独特な網状砂洲をつくりながら流れています。この砂洲が瀬や淵やよみをつくり、魚をはじめとする水生生物にとって、多様で優しい生息環境をつくっています。

札内川上流域は日本最大の国定公園

札内川上流域一帯は、水河期の遺構とされるカール地形をはじめ、美しい稜線、雪渓、峡谷、渓谷が造形され、その景観は他に類を見ません。さらに上流域には、ナキウサギ、カワセミ、ヤマセミ、オショロコマ、エソサンショウウオ、ケショウウアナギ等、貴重な動物植物が生息し、昭和五十六年十月一日「日高山脈襟裳国定公園」として国定公園に指定されています。

その地域は日高山脈と南端の襟裳岬までの一〇三・四・三七平方キロメートルで、国定公園としては日本最大のものです。

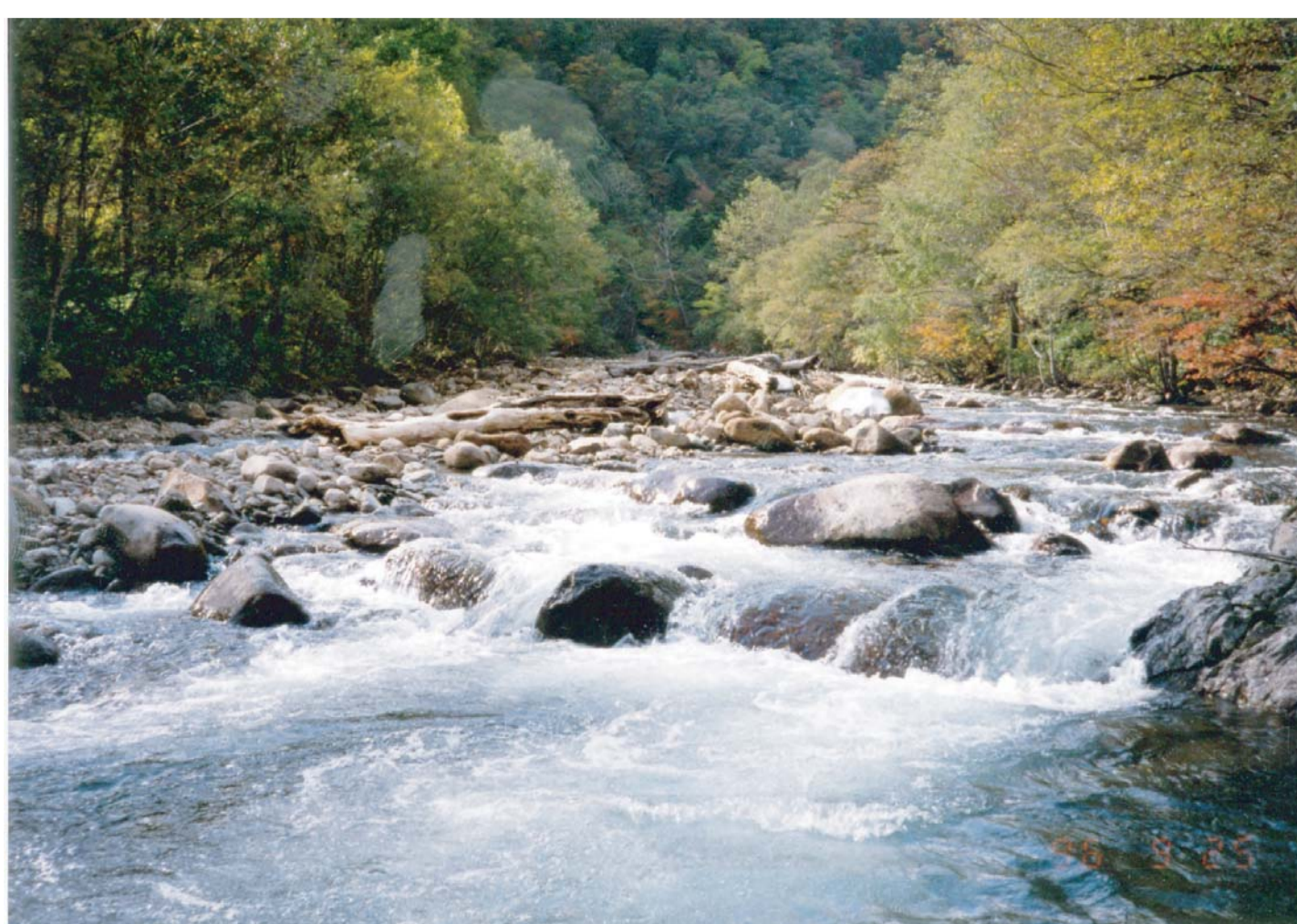
札内川の砂防

札内川はその支流の戸簾別川、岩内川は急峻な日高山脈から流れているのに加え、河川及びその流域に堆積した不安定土砂が多く、大雨の時にはそれが洪水と一緒に流れ下り、過去において下流域に大きな災害をもたらしてきました。

特に昭和三十年七月に発生した台風による集中豪雨によって起きた洪水は、中札内農協発電タムの埋没（現在のビュウタンの滝はその跡です）、建造物の破壊流出をはじめ、農地二〇三彩を右原とする大きな被害をもたらしました。

そこで昭和四十七年から札内川流域における直轄砂防事業に着手し、昭和五十年には最初の施設として、札内川第一号砂防えん堤が完成しました。

現在、国が建設した砂防えん堤は札内川に五基、戸簾別川に五基、岩内川に二基が完成しています。また不安定土砂量の多い戸簾別川では、土砂の再移動防止策として、昭和六十三年より床固工群の整備や、併せて土砂流出の抑制・調節を図ることを目的とした砂防植林（緑の砂防ゾーン）を進めています。



札内川上流（本流）八の沢合流点より上流



日高山脈の美しい稜線は、森林限界で、ハイマツ帯となっている